

争論 インターネットはどんな「つながり」を紡ぐのか？

インターネットが築く社会関係資本の課題と展望

柴内 康文

東京経済大学教授

聞き手：加賀美太記（就実大学講師）



「つながり」を捉える 「社会関係資本」

【加賀美】社会学を中心とした領域には、人々の関係性を捉える「社会関係資本」という考え方があります。研究者以外はまだ聞きなれないかもしれない、「社会関係資本」という考え方はどのようなものなのでしょう。

【柴内】「つながり」や「絆」が重視されるようになり、それを学問的に考える必要が出てきたとき、その蓄積が利益を生み出していく、いわば「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」とこれと呼べるのではないかと多くの研究者が捉えてきました。

こうした議論が始まったのは、おそらく1990年代からだと思います。言葉自体は古くからあった、といわれたりもしています。しかし、概念として重視されるようになったのは、比較的最近のことです。とりわけ、この分野の代表的な研究者であるロバート・パットナムが1993年に出版した『哲学する民主主義』、また2000年に出版されて、私が邦訳させていただいた『孤独なボウリング』などがきっかけだったと思います。これらを通じて、社会におけるつながりの豊かさという問題が意識されるようになってきました。

社会関係資本という概念は、人同士のつ

ながりが、社会におけるやり取り、交換の効率をよくして、プラスの効果を生みだしやすくなるというメカニズムを基本にしています。また、つながりの量は、個人のレベルで測ることも、中間的な集団や社会全体で測ることもできます。たとえば、個人に関しては、コネをたくさん持っている人とそうではない人、中間的な集団でいえば、社員同士のつながりの豊かな会社とそれに乏しい会社というように考えます。

そうした中で、パットナムが重視したのは、「地域やコミュニティにも、つながりが豊かなところとそうではないところがある」という視点です。そして、コミュニティにおけるつながりの多さが、地域の発展や、そこで生じる問題の少なさに関係しているのではないかと考えました。

パットナムの議論が注目されたのは、つながりの豊かさが周囲への波及効果を持っていることを指摘したからです。たとえば、個人にとってのつながりの豊かさは、その人が職探しでうまくいく、あるいは経済的に成功するなど、個人に影響してきます。しかし、地域のつながりが豊かだということは、特段つながっていない人にも様々なメリットをもたらします。要するに、地域のつながりの豊かさは、直接つながりを持っている個人を超えて、周囲にあふれ出すような効果がある。つながりは当事者を超えたところにも役割や意味があり、だか

からこそ私たちは、絆というものを意識しないといけないということです。彼の指摘は大きな反響を呼びました。実際に、1990年代から2010年代にかけて、ソーシャル・キャピタルという概念を使った議論と研究は、非常にたくさん行われるようになりました。

この、ソーシャル・キャピタルという言葉は大震災と前後して、一般的な書籍のなかでも重要ではないかと言われる機会が増えました。なお「絆」や「つながり」という言葉が新聞にどれくらい出たかというグラフをつくったことがあります。実は震災前からこうした言葉の登場回数は増えていて、2011年の震災を機にさらに増加するようになっていました。そのような背景もあって、いまでは社会関係資本というのは、専門用語の範疇を超えつつあるのかな、と思っています。

【加賀美】 社会関係資本には、個人や地域にとってよい効果があるということが、この概念が注目された理由なのですね。具体的な効果はどのようなものなのでしょう。

【柴内】 パットナム自身の議論としては、犯罪率などを取り上げていますが、たとえば地域の安全・安心につながってくるといことです。それから、地域住民の健康や幸福への影響、経済発展、児童福祉などの子どもの問題、さらには民主主義的な政府が実現しやすいだろうという辺りですね。

こうした影響をもたらす社会関係資本は、先程も述べましたが、いくつかのレベルに分けることができます。個人のレベルでは、つながりの多い人もいれば、孤独な人もいます。そして、つながりの多い人のほうが、いろいろな意味で成功にもつながるだろうし、健康にもなりやすいだろうし、つながりが少ない人はうまくいきにくいだ

ろうと考えます。

これに対して、パットナムはかなりマクロに捉えています。地域全体として見たときに、より人びとがつながっていて、信頼し合っているような街もあれば、そうではなく、お互いによく見知っていないような街もある、というレベルで考えました。

また日本大学の稲葉陽二先生は、ソーシャル・キャピタルの研究をされていますが、個人とマクロの間にある中間的なレベルのことも含め考えています。実際のところ、集団レベルでも、内部や外部とのつながりの多い組織もあれば、そうではない組織もあって、たとえば社員相互のつながりを多く有している会社と、そうでない会社では、当然、組織のあり方も発展のあり方も違って来る、と考えられます。

ソーシャル・キャピタルをどのレベルで捉えるかは、研究者によっていろいろな考え方があり、得られると想定される効果もさまざまです。

その辺がソーシャル・キャピタルという概念が批判されるポイントです。いろいろなものを捉えるときに融通無碍に使ってしまう概念なので、「あれもソーシャル・キャピタル、これもソーシャル・キャピタル」とか「うまくいったのはソーシャル・キャピタルが理由だ」というような、万能の説明概念として用いられたりしてしまう。どうしてそのような結果が起こるのかについて曖昧ではないか、といった批判があります。

つまり、融通の利きすぎというか、使う人がそれぞれに「ソーシャル・キャピタル」という概念を捉えてしまうきらいがあるので、厳密さを重んじる研究者のなかには「ソーシャル・キャピタルは個人のレベルでの資源の量というかたちでしか捉えない」と言う人もいますし、「そもそもソー

シャル・キャピタルという概念は、他の言葉に置き換えることができるので、この言葉を使わないほうがいい」と言う人すらいます。

ただ、いろいろな現象を大きく捉える概念装置になっているというのは、魅力でもあると個人的には思います。それは、社会のあり方を捉えるときにも、個人の問題を捉えるときにも、広い視点・視野から捉えることができるということであり、さまざまな形で起こり、固別に研究されてしまいがちなことを統一的に捉えることができるからです。ですから、批判を受けとめながら、概念としてうまく使ったり、検討していく必要があるかなと思います。

日本の社会関係資本は弱くなったのか

【加賀美】 社会関係資本の議論のきっかけとなったパットナムの研究の背景には、1970年代以降、社会関係資本が以前に比べて弱くなっているのではないか、という問題意識があるように読み取りました。パットナムの視線はアメリカ社会にあったわけですが、日本社会でもそうした傾向はあったのでしょうか。

【柴内】 それは議論があるところです。弱くなったという見解もあれば、あまり弱くなっていないのではないか、という意見もあります。たとえば、ボランティアについてですが、1990年代の後半、とくに阪神・淡路大震災があった95年は「ボランティア元年」とも呼ばれ、ボランティアは特別なものでなく一般の市民も多く参加するものだという感じになりました。ボランティアのように、90年代後半は、新しいつながりのつくり方やあり方が脚光を浴びました。そう考えると、必ずしもつながりが弱

くなった、とは言えないことになります。

そもそも、昔のほうが人情やつながりがあったというのは、おそらく常に言われ続けてきたことでしょうし、何か事件があるとすぐに「つながりの弱体化」がいわれます。くらしの面では、マンションに住む人が増えるなど、住みなし方にも変化がありました。結局のところ、90年代以降のそうした変化や社会の在り方を説明する言葉として、日本でも「社会関係資本」がうまくあてはまったのかなと思います。

このように、つながりが減ったかどうかはともかく、つながりに対する意識が高まるようになったのは、95年前後だったのだと思います。震災と直接結びつくかどうかは別問題でしょうが、ボランティアに関心が集まりましたし、インターネットも95年頃からその存在が社会で広く認識されるようになりました。

実際、95年以前のパソコン通信の時代から、90年代後半にはインターネット時代へと変わり、人のつながりのあり方、コミュニケーションのあり方が大きく変わりました。つながりがもっと増えるのではないかということも含めて意識が高まるような機運が90年代中盤にはあったのでしょうね。

インターネットに関しては世界的な現象で、大きな時代背景としてはそういうことがあったのだと思います。またネットワーク論のような学問的アプローチで、社会的ネットワークを分析するといったことが、学術的に意識され始めたのも、その頃だったのではないのでしょうか。いまから振り返ると、「あの頃は『ネットワーク』の時代だったなあ」と思うところがありますね。ただそれは、単純なつながりの弱体化といった問題を背景にしていたわけではないと思います。

インターネットが紡ぐ つながりへの期待と現実

【加賀美】 95 年頃、ネットの登場によって大きな変化が出てきたというお話ですが、インターネットと社会関係資本やつながりに関して、どのような変化や可能性が広がったのか、もう少し詳しくお聞かせください。

【柴内】 このあたりも一筋縄ではいかなくて、いろいろな話をするようになりますが(笑)。私がソーシャル・キャピタルに手を出すきっかけになったのはネットの問題でした。そもそも私は社会心理学者で、初めはパソコン通信の研究から入って、その後コミュニケーションとメディア全般へと分野を広げていきました。

95 年当時は、パソコン通信やインターネットができたことによって、多様な人間との新しいつながりができるのではないかと、という関心が非常に高まった時期です。それまでの人間関係は、地縁や血縁、あるいは職場や学校の友人、知り合いなどによって形成されてきましたが、パソコン通信やインターネットは、そうした関係の外にいる人と関係を生みだすきっかけになるのではないかと、ということが、すごく意識されたわけです。

とくに初期のパソコン通信やインターネットは、ふだん付き合いがないとか、想像しにくいような人とつながることができました。性別や年齢もよくわからない人とも場を共有して、新しい知り合いになったり、つながりができたりしました。こうした、ある種の多様な人間関係が生みだされ、広がっていくのではないかと、という期待があったと思います。パソコン通信をきっかけに結婚する人も出てきて、話題になった

りしたものです。

これに関連して、ソーシャル・キャピタルは、しばしば 2 つに分けて捉えられることがあります。ひとつは結束型のソーシャル・キャピタル、もうひとつは橋渡し型のソーシャル・キャピタルです。緊密に結びついた強い人間関係がある一方、人種や所属する集団が違う人との間に橋を架けるようなつながりがある。あるいは、同じ組織内でも、緊密なつながりと、他の集団との橋を架けるつながりがある。それらを分けて、結束型と橋渡し型のソーシャル・キャピタルというわけです。

現実にはどちらも大事です。結束型のソーシャル・キャピタルは安定や支えをもたらしてくれるし、橋渡し型のソーシャル・キャピタルがあるということは、いろいろな知識や情報を得たり、チャンスをつかんだりすることにつながる。

インターネットへの最初の期待は、おそらく多様なつながりを築くという意味で、橋渡し型の、すなわちまったく知らない人たちや新しい人たちとのつながりをつくっていく可能性の部分が大きかったのではないかと思います。しかし 2000 年以降、ネットが一気に普及し、さらに携帯電話のインターネット化が進んで、メールやウェブが携帯電話でできるようになりました。固定電話より携帯電話の台数のほうも増え、人びとがそういう道具を持ち歩くようになるなかで、インターネット上でつくられる人間関係は、多様なものというよりも、むしろ日常のコミュニケーションやネットワークの延長線上にあるものになりました。ふだん顔を合わせる相手と強いつながりの中でコミュニケーションするための道具であり、多様なつながりを築くためではなくっていった、ということがあると思います。

その意味でインターネットは、日常の道

具になったということでしょうが、もちろんそれを飛び越えるようなものも現在でも存在しています。たとえばツイッターで誰かにレスをして、そこから新しいつながりができたといったことは、いまでも色々なところで起こっていると思います。しかし、やはり多くの使われ方としては、あまりそうした感じはなくなってきているのではないのでしょうか。

パソコンとケータイが築く つながりの違い

【加賀美】 ネットの主な使われ方が、多様なつながりを生み出す方向から、徐々に強いつながりの中へと移ってきたということですが、そうした変化はやはりネット上のサービスの影響を受けているのでしょうか。

【柴内】 そうですね。例えばLINEがサービスを始めたのは2011年、東日本大震災の後でしたが、LINEというサービス自体が震災をきっかけにつくられた面があります。たとえば、既読表示のような機能がついているのも、おそらく安否確認という意味です。メールにはそのような仕組みはなく、LINEがわざわざそういう機能を設けたのには、社会的な意味合いがあったのだと思います。

しかし一方で、それは知り合いの間で返信を促すようなプレッシャーを与えている側面もあって「LINE疲れ」のような問題にもつながってくるのかもしれません。

また、パソコンとケータイというネットにつながる機器の変化も大きいと言われています。2000年代半ばには、ネットに接続できるケータイが広く普及して、とくに若者が「パソコンなんて使わない。自分はケータイでいい」ということになりました。

ケータイは、ネット機能を持っていますが、やはり内々の結束的なつながりは強化するけれども、橋渡しのつながりをもたらしものにはなりにくい。一方で、パソコンは、それよりも外の、橋渡しのつながりを生みだすのに資するのではないかという議論を、国内の研究者たちがしていたこともあります。しかし、それから時代はさらに先に進み、そもそもパソコンをみなが使わなくなってきているという現実があります。とくに若い人たちは、LINEやインスタグラムなどのソーシャルメディアがコミュニケーションの中心となり、ネットも今では基本的にスマホです。そうすると、その人のつながりの世界がいまよりも広がっていくことはあまり期待できないのかもしれませんが。とはいえ、ソーシャルメディアにもいろいろなサービス、アプリがありますから、それぞれが作り出すつながりに向き・不向きのような違いはあるようにも思います。

インターネットは 世界を狭める可能性

ここでもうひとつ気になるのは、昔のパソコン通信や電子メールのやり取りをしていた時代のインターネットであれば、メールアドレスを入力する、ネットサーフィンをする、掲示板にいろいろな書き込みをするなど、いずれにしろその人の能動性というか、自分で見つけてアクセスしなければいけない環境があったと思います。

しかし、現代のさまざまなサービスの特色のひとつは、インターネット上のやり取りや閲覧情報を使った「おすすめ」や、フィルタリングの仕組みがあることです。つまり、システムの側が「あなたはこういうことに興味があるのではないですか」、「あなたはこういう人と知り合いではないです

か」と提案してくる。

たとえば商品のサイトへ行っても、「この商品を買った人はこういう商品も買っています」と勧められて、「たしかに、これも欲しかったんだ」と気づいたりします。それに、「あなたは、この人とこの人と友だちだから、この人とも友だちですよ」というふうに勧めてきます。とても便利な仕組みなのですが、個人に見える世界のあり方やつながる人の範囲を狭めてしまうかもしれないというところは、若干危惧しているところです。

もちろん、その人は当然、そういう物や人たちに関心を持つだろうし、サイトのアクセス数も増えるだろうから、そのようなリコメンデーションが行われているのですが、それはつながり、接触の多様性を広げる方向に作用していないような気がします。

実際、ニュースサイトにしても、閲覧履歴によって「あなたはこのニュースに関心があるでしょう？」と調整されているため、アメリカでは例えばトランプ派とそうではない人とは見ている世界が違う、などということが起こっている可能性もあるでしょう。あるいはソーシャルメディアでは、お互いにフォローし、リツイートしながら情報が広がっていきます。この仕組みでは、自分が関心のある、あるいは自分の考え方に近い人や情報に触れやすくなっています。それがまた、世界を分けてしまう。その内部では多数派の気持ちでいられるし、安心できたり、「そうだ、そうだ」と思えるかもしれないけれども、他の世界が見えなかったり、つながりがつくれなかったりするようになってしまうかもしれない。これは、やはり気になる場所ですね。

【加賀美】 現代のインターネットが、個人

へのカスタマイズを深めることで、意識せずに結束型のつながりを生む方向に進んでいる、ということになるのでしょうか。

【柴内】 その辺りは議論があります。たとえば、Yahoo! のニュースのトピックスについて、「多くの人が接触するなかで、実は自分が関心を持っていないような見出しも見られている。結果として社会に広く情報を伝えている」という議論もあつたりします。そこでは、ある意味、メディアとしてのあり方としても議論されています。いまでは、そうした部分を意識して、トップページではフィルターを利かせず、多様なものを見せることを重視したり、セレンディピティ（偶然の出会い）の価値を意識したサービスを提供しているところもあると思います。

だから、ユーザー側のメディアの使い方やメディア環境の理解の仕方として、「いまの自分が見ている世界やつながっている人びとは、じつはある程度制約のかかった、限られたものであるかもしれない」ということには自覚的になる必要がある時代なのかなと思います。そうでないと、「いや、こういう考え方の人が普通でしょ？ 自分のフォロー関係でも、そういう人ばかりだよ」とお互いに言い合ってばかりいるような世の中になるし、それはあまりいいことだとは思えないというのはありますね。

社会関係資本としての 生協とインターネットの関係

【加賀美】 ここまで社会関係資本とインターネットについてお話いただきましたが、それぞれの視角と協同組合との関係についてはいかがでしょうか。協同組合は地縁的な社会関係資本を基にした組織だと思いま

すが、こうした組織は、近年のインターネットの普及や社会全体の変化に、どのように向き合っていけばいいのでしょうか。

【柴内】じつは研究上、生協はソーシャル・キャピタルを測定する上での事例の一つになっているんです。社会学の代表的な調査研究に、「日本版総合的社会調査（Japanese General Social Survey：JGSS）」というものがありますが、ここでは社会参加の項目の一つに消費者生活協同組合が入っています。つまり、政治、地縁、組織、ボランティア、NPO、市民の会、宗教、趣味の会等々の団体に、どれぐらい参加しているか、どれぐらいつながりを持っているかが、その人のネットワークの広がりの方として測定されていて、その一要素として生協が使われているのです。これは海外における調査研究でも同様です。

ただ、調査結果についていうと、2012年の調査で、積極的な生協参加者は約2.7%、「生協を利用するので入っているけど…」という感じでしょうか、積極的ではない人が13%ぐらい、1年間に最も盛んに参加した活動で「生協」と答えた人は1%です。数字の大小に見方はあると思いますが、生協がソーシャル・キャピタルの構成要素としての、社会参加の測定の対象となっているということは事実です。

そのうえで、私は生協についてあまりよくわかっていないので、簡単に言うことは難しいのですが、たとえば、パットナムの議論のなかで、娯楽やスポーツが「するもの」から「観るもの」に変わってしまったという話があります。昔は野球チームがあったりして、みんな、もっとスポーツをやっていた。書名にボウリングと挙がっていたように、みんなで町にボウリング場に繰り出して、チームボウリングをやっていた。

音楽も、演奏するものだった。そのように自発的に人びとと関わっていくことがソーシャル・キャピタルを生みだしていたけれども、いまは「するもの」ではなくて「観るもの」に変化してしまった。そして、いまではチームボウリングではなく、『孤独なボウリング』になってしまった、と。

生協について、この議論を直接に反映させていいのかには注意を要しますが、生協という自ら関わる「つながり」が、いまは「よい商品いいものを手に入れるのための一つの『手段』」になってしまっていないかどうかは、関係する論点かなと思います。

つまり、自分から「関わっていくもの」ではなく、「おいしいもの・安全なものが手に入るサービス」という理解が広がってしまえば、「サービスなら他にも選択肢がある」という事でスーパーなどへと利用が移っていく、という事なのかもしれません。

世の中のいろいろな領域で、こうした傾向が出てきています。だから、たとえば生協の売り文句が「安全なものが買えます」「いいものが安く買えます」であれば、商品はべつにこれでもなくてもいいし、関わらないで受け手だけになってしまうのかもしれない。そうならないためには、「手段」や「サービス」ではない部分をいかにまた新たにつくるかが、大事になってくると思います。

インターネットについても、現在のネットサービスの多くは、話が通じる人とつながりやすくなるよう設計されているし、実際に使われてしまっています。放っておくと、話の通じる内輪のつながりやコミュニケーションのためにだけ使われてしまい、そこでは盛り上がっているけれども、外からは冷めた目で見られている…ということになりかねません。そこは自覚的になって、むしろ多様なもの、考えの異なる人、立場

の違う人、異なる組織・集団、あるいは社会に橋を架けることを意識すべきかと思います。

おそらく、今後もネットの世界では新しいサービスが出てきて、環境は大きく変わっていくと思いますし、ネットが当たり前の世界で育ってきた人たちが増えていきます。それについていかなければいけないし、新しいサービスや新しい世代の使い方をちゃんと理解して、キャッチアップしていくこと自体、多様性のための橋を架けることになるのではないかと思います。

【加賀美】 生協はやはり「安全・安心」といった関心事が共通していますし、主たる組合員層の同質性は高いと思います。しかし、規模の拡大にともなって、組合員の多様性が広がっているのも事実です。こうした内部の多様性だけでなく、外部にも目を向けていくべきなのですね。

【柴内】 そうですね。しかし、つながりは強制するものではありません。共通の関心事があったり、互いに意味があるものがないければ、つながりは生みだされないと思います。ですから、そのようなきっかけをいかに見つけ、開発できるかが大事です。いくらネットを活用して、新しい仕掛けをつくって、「使ってください」と言っても、そんなものは使われないし、強制されたつながりは「つながり」ではない。むしろ、「自発的な」ということこそがソーシャル・キャピタルの本義です。

さらにいえば、前向きな話ではないかもしれませんが、震災以降に「絆」が言われるのは、互いに共有された体験、関心事があるからです。実際につながることによって助けられたり、救えたりするものがあるからこそ、絆の重要性がすごく意識され、

みながつながったりするのだろーと思います。バットナムも、戦争体験すらも絆をつくりだすことに貢献していたのではないかと指摘しています。危機の共有は、自発的につながろうとすることに資する面がある。もちろん、強制された面もあったと思いますが。

しかし、当然ながら、「それなら危機があればいい」という話にはなりません。だからこそ、何かプラスの共通の関心事からお互いに得られるものが発掘されることが大事なポイントなのかなと思います。

また、いまは強くつながらなくても不自由なく暮らせるから、いろいろなサービスがそれを肩代わりしているから、友だちをつくらなくてもいいし、結婚しなくてもなんとかなるという面があります。ただ、その延長線上には孤独死や無葬化という話もあります。でも、「そうなるのはいやだろーから、いやでもつながっておけ」というのも変な話ですし、「だから、そういうサービスはやめたほうがいいんだ」という話にもならない。個人の自由が一番尊重されるべきであることは疑いありません。

結局のところ、単純な解があるわけではない、難しい問題だと思います。でも、みなのために、いかにそういうものが設定できるかを考え続けることが、きっと大事なんでしょう。そうでないと、内輪の、話がわかる人だけの、小さいつながりにとどまってしまうのかなと思います。

【加賀美】 多様な集団や個人にとって、お互いに意味のある何かを見つけ出すことが、現代における生協にとっての課題だと受け取りました。そこで上手にネットを使っていくことも同じく大きな課題ですね。本日はどうもありがとうございました。